

コンサート04年NO1

「オービック・スペシャル・コンサート2004 ～春を呼ぶコンサート～」

2004（平成16）年3月18日鑑賞く
ザ・シンフォニーホール>

<主催は「コンピューターのオービック」>

コンピューターの「オービック」は、弁護士としての私の長年にわたる顧問会社。そのオービックは、毎年大阪のシンフォニーホールで、『春を呼ぶコンサート』をやっており、今年はその第8回目。

今年のプログラムは次のとおり。

指揮：小林研一郎

独奏：前橋汀子

管弦楽：大阪フィルハーモニー交響楽団

曲目

①モーツァルト セレナード 第13番 ト長調 K. 525『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』

②メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 木短調 作品64

③ベートーヴェン 交響曲 第5番 八短調 作品67『運命』

「これぞ極めつけ」と言ってよいような、クラシックの曲としては最もポピュラーなものを選んだのが、今年の『春のコンサート』の特徴だ。

<前橋氏の情熱的なヴァイオリンにびっくり>

ヴァイオリンの世界で、前橋氏は今や超ベテランの域に入る第一人者。かなり派手な(?) 衣装で登場した前橋氏のメンデルスゾーンは、「炎の指揮者」と呼ばれる小林研一郎氏との絶妙な呼吸がピッタリ合ったためか、身体を大きく揺らしながらのダイナミックな弾き方。とても〇〇歳とは思えない、ものすごい迫力。終了後のヤンヤンヤの拍手喝采も当然だ。

<うねる小林氏の『運命』>

続くメインの交響曲は、ベートーヴェンの『運命』。かつてのLPレコード全盛時代、『運命』と『新世界』をカップリングしたLPレコードは、指揮者や交響楽団によって、何十種類と出されており、私もよく聞き比べをしたものだ。

一番テンポが早いのは「カラヤン」指揮のもので、ゆったりと悠然としたテンポのものが「ブルーノ・ワルター」指揮のもの。また幻の名盤と呼ばれた「フルトベングラー」指揮の『運命』は、録音状態は悪いものの、ものすごいテンポと圧倒的な迫力が語り草となっていたもの。クラシックファンにはそれぞれの好みがあり、音楽談義になると、時間を経つのも忘れてアレコレとやっていたことを思い出す。

小林研一郎氏指揮の『運命』も、テンポが速く、その上、静かなところは静かに、ダイナミックなところはあくまでダイナミックに、という非常にメリハリの効いた演奏で、うねるように進んでいくもの。久しぶりに、ダイナミックな『運命』を堪能することができた。

<番外編>

このオービックの春のコンサートには、最近ずっと「番外編」がついている。それは、シンフォニーホールのすぐ近くにある、古くからの割烹料理店でおいしいてっちりを食べること。昨年も一昨年も妻と息子そしてプラスアルファで……。そして今年は……？

実は私たちは、既にオービックの役員を退任して今や悠々自適で、ゴルフ三昧の生活を楽んでいるU氏を中心とするグループでこの店での食事会を予定していた。そして他方、指揮者の小林研一郎氏に同席していただいたの社長たちの食事会もこの同じ店で予約されていた。当初は別々の部屋で……。ということになっていたが、三々五々、店に集まると、社長の鶴の一声(?) で、「どうせならみんな一緒に」ということに落ち着いた。そのため総勢20名を越える大盛會に。私は小林研一郎氏のすぐ斜め前に座り、音楽談義に花を咲かせた。もちろん、翌日予定されている社長や小林研一郎氏たちのゴルフ談義がメインで、これは大いに盛り上がったが……。

<指揮者の観察眼にびっくり!>

てっちりを食べながらのお話の中で、私が指揮者の指揮スタイルや前橋汀子氏のヴァイオリン演奏のスタイルなどいろいろ細かく観察した話をしていると、突然小林研一郎氏から、「真ん中の右側あたりの席でオペラグラスで観ていた人が坂和先生ですか?」と言われてびっくり。まさにそのとおりで、私はかなり執拗にオペラグラスで小林研一郎氏や前橋汀子氏の一挙手一投足を観察していたのだ。私の他にそういう人は誰もいなかったから目立ったかもしれないが、それにしても指揮者が会場の観客を見ながら話しかける時間はほんの数分だけ。そんな瞬間的な観察だけで、オペラグラスで観ていた一人の観客のことを印象に残していたという一瞬の観察眼には、さすがと感心するばかり。2時間余りの食事の中でのお話の中で、小林研一郎氏がこんなにざっくばらんで楽しい人だったことがよくわかり、今回は本当に楽しい番外編となった。